

書評

吉川良和著

『北京における近代伝統演劇の曙光——非文字文化に魂を燃やした人々——』（創文社）

山口 建治（神奈川大学外国語学部 教授）

この書の何よりの功績は、書名にあるとおり、清末民初の北京の伝統演劇の状況を当時の新聞資料などを使って克明に描き出し、歴史上名もない役者が「民衆の教師」としての役割を担って、国民国家としての近代中国を切り拓くうえで、どれほど重要な仕事をしたかを、事実に基づき明らかにしたことである。田際雲・劉喜奎・鮮靈芝（以上梆子劇）・梅蘭芳（京劇）などの役者が成し遂げたことの意味が、おそらく初めて本格的に明らかにされた。

冒頭の「用語と史料」に「本書は少しでも史実に近くよう心がけ、近年書かれているものは、資料的なもの以外、極力避けた」とある。現在の高みに立って賢しらに過去の出来事を論うような姿勢は一切見えない。新聞記事を多用するという本書の性格上、ややもすると叙述が間延びしそうなのだが、叙述は簡潔で引き締まっている。

おそらく著者の長年にわたる伝統芸能調査・鑑賞体験から得たものと思うが、新聞など文字資料から読み取る情報量が半端ではない。100年前の演劇研究である以上、新聞・書籍などの文字資料に頼るしかない。しかし、著者の意図するのは、あくまでも非文字文化としての演劇であり、わずかな文字資料から役者の演技、うたいぶり、せりふ、舞台装置、音楽、観客の反応などなどの、文字では表しにくい種々の情報をありありと読み解いた上での記述になっている。そういう著者ならではの能力があってこそ、名もない役者が中国近代を切り拓いたなどという、おそらく本国の中国人ですら考えつかなかったような大胆な説を、些かの外連味もなく主張できたのである。

第二四章は本書全体を要約したものであり、珠玉の言が多い。「娼妓・優妓たちが自分の儲けを度外視して、積極的に義務戯（慈善芝居）を催したのは、慈善を尽くし、公益に寄与すれば、被差別民から抜け出せ、世間から『一国民』として認められるという期待をもってからだ。・・・このように、晩清では、社会の最下層にいた娼妓がしっかりした理念のもとに社会貢献に参画し、演説をして、民衆、とりわけ無筆の多かった北京の女性たちや、一般民衆を覚醒・啓蒙しようとした。この

結果、・・・三大禁令が緩められて、近代伝統演劇への道が拓けた。・・・それは彼女たちが手を拱いていて授与された改革ではない。」

「このような絶望的な暗黒時代において、しかも被差別民として蔑まれた役者や優妓・坤角（女優のこと）のな

かに、決して希望を捨てず、義務戯や警醒啓蒙新編戯で、最下層の『口語体に直してもわからない』民衆に、非文字文化の演劇をもって、近代の訪れを知らせ、近代の思想・知識を伝えようと奮闘努力した人物が中国にいたことは、今日の我々にも肅然として尊崇の気持ちを起こさせる。こうした不屈の意志をもって、非文字文化としての演劇が有する近代的な力を発揮し、民衆の教師たらんとした者がいた。」

跋語に、かつて本書の元になった論文二本をある先生に見せたら、「こんな研究は傍系の垂流だね」と切って捨てられた、とある。こうした批判に真正面から答えようとしたのが本書である。著者は自らの非文字文化の研究を中国学の支柱にまで高めないと、「決まり切った中国学者の立論や興味本位の伝聞を摘み食いして、片手間にいい加減な随想風な雑文を書き、安易な業績稼ぎに走りかねない」悪循環に陥ると危惧したとあるが、おおくの中国学者研究者にとり、耳の痛いことばであろう。

従来中国学といえば、文言（日本語でいう漢文）で書かれた評価の定まった古典を、何か気の利いた理屈で再解釈するだけのものが多かった。著者の提唱する中国非文字文化研究とはそれとは真逆であり、これまでの研究ではほとんど無視され価値がないとされてきた、声と音で伝承された民衆の民間文化に光をあて、そこに今日につながる価値があることを、観念的ではなく事実をもって再認識させてくれた。そこにこれからの中国研究の新たな沃野が拓かれると、著者は力強く本書で訴えかけている。

